

世界の地域から



大明寺（鑑真記念堂）

大明寺は千年の歴史を持つ仏教寺院で、仏堂、文化財、庭園、仏教教育施設等が集積した国家重要文化財指定史跡かつ国家4A級観光地です。

境内にある鑑真記念堂（写真小）は、鑑真の逝去1200年を記念するために建立され（1973年落成）、奈良の唐招提寺の金堂と同じ建築様式を採用しており、内部には鑑真和上坐像（写真大）が安置されています。

江蘇省揚州市（中華人民共和国）

揚州市は江蘇省の中部に位置する地級市で、人口は459.2万人（2007年統計）、面積は6,638km²です。北は淮水と接し、南は長江に臨み、それら2つの大河を結ぶ「京杭大運河」が市街地のすぐ近くを通っています。

揚州市は、国家最高クラスの観光地である瘦西湖、大明寺、個園などを有する中国を代表する観光都市の1つであるとともに、2006年には「国連人間居住計画（ハビタット）賞」を受賞するなど、世界的に見て居住環境の優れた都市でもあります。さらに、唐代に日本に渡り唐招提寺を建立した鑑真の故郷でもあることから、日中地域間交流の発祥地とも言えます。





京杭大運河

隋の煬帝により整備された北京と杭州を結ぶ全長1794kmの大運河で、揚州市内を通る143.3kmは、紀元前486年に呉に滅ぼされた邗(かん)が北の淮水と南の長江を結ぶ形で開削した邗溝(かんこう)を組み入れたものであることから、揚州は大運河の原点と言えます。

瘦西湖

その名称は杭州の西湖に似て形が細いことに由来し、清代の乾隆帝に纏わるエピソードが数多くあります。また、南方の優美さと北方の壮大さを融合した独特の美しさを有しており、「長堤春柳」というしだれ柳の道や、釣魚台、五亭橋、白塔、二十四橋等に接すると、まるで長編の山水絵巻を見るような感覚となります。



↑ 夕闇に迫る五亭橋(左)と白塔(右)



↑ 二十四橋

文昌閣

揚州市内の中心部にあり、もともとは古代の公的教育機関である「揚州府学」内で科挙合格等を祈る「魁星楼」として建立されました。また、その名称には「文化昌盛」の意味が込められています。



↑ 乾隆帝が釣りを楽しんだとされる釣魚台



個園

中国四大庭園の1つに数えられ、園内に沢山植えられている竹と、形の奇怪な石、特に四季を表すそれぞれの築山が有名です。



何園

「寄嘯山莊」とも呼ばれる大型庭園であり、長さが1500mに及ぶ複式回廊は専門家から「陸橋の原型」とも言われ、「天下第一廊」や「一廊で江南を貫く」などの称賛を受けています。



漢陵苑（漢広陵王博物館）

前漢期の初代広陵国王であった劉胥（武帝の息子）とその夫人の墓を展示した施設です。皮を剥いた黄色い柏の木を積み重ねて、棺を安置する空間を作る「黄腸題湊」という様式を採用しており、漢代の大型陵古墳の中でも希少価値を有しております。



双東歴史街区

揚州市が全力を挙げて再開発に取り組んでいる新しい観光地であり、一度中に入ると、古代の町を歩いている感覚を味わうことができます。

潤揚大橋

長江を跨いで対岸にある鎮江市と結ぶ全長35.66kmの吊り橋です(2005年開通)。この橋の開通により、従来船で往来していた鎮江との距離が大幅に短縮されるとともに、長江デルタ地域全体の高速道路網の充実に大きな役割を果たしています。



揚州経済開発区

1992年に建設が開始され、翌年には江蘇省から省レベルの開発区に認定されました。特に、新エネルギー、新光源、新材料の「三新産業」の集積を進めており、LED（発光ダイオード）については、既に中国有数の生産拠点となっています。

淮揚料理

淮陰料理と揚州料理の総称で、その起源は春秋時代に遡り、隋・唐に発展し、明・清代に隆盛を極め、「東南地域一の美味、天下の美味」と称賛されています。その大きな特徴としては、素材にこだわり現地の食材を多く利用する、包丁さばきが巧みである、素材本来の味を重視する、の3点が挙げられます。



↑ 揚州を代表する味である揚州炒飯



↑ 「紅樓夢」の世界をイメージした淮揚料理「紅樓宴」

写真提供：揚州市人民政府外事弁公室